

城端曳山祭

城端曳山祭は、南砺市の一部である城端町で毎年5月4日と5日に行われている祭りで、御神像を運ぶ大きな6基の曳山が通りを巡行するのが目玉となっています。この祭りは、何世代にもわたって受け継がれてきた独特な巡行祭の形式を守っている日本の「山・鉦・屋台行事」の中の1件として、ユネスコの無形文化遺産に登録されています。

城端町は福光の浄土真宗の寺院、善徳寺が1559年にその地域に移転した後に開町しました。その後まもなく、善徳寺の周辺で市場やその他の事業が立ち上げられ、城端はやがて門前町となりました。1693年には、城端の人口は3千人以上に達し、しっかりとした町が確立されました。江戸時代（1603-1867）には、加賀藩の後援の下で城端の絹織物業が発達し、高品質な絹の販売は京都や現在の東京などの他地域へと広がりました。これらの都市間では文化交流も行われ、城端の文芸作品、学問、芸術にも新たな焦点が当てられるようになりました。

城端曳山祭は1574年に建立された城端神明宮で行われます。この神社での祭りは1685年に始まりましたが、現在の形式になったのは、城端が不景気にあえいでいた享保（1716-1736）の間のことです。経済を回復させるため、城端の人々は幸運を祈願して、神を祀るための祭りを開き始めたのです。1717年の祭りで神輿、傘鉦（天から神霊を招くもの）、獅子舞が取り入れられました。数年後の1724年には、御神像を運ぶ曳山が祭りに加わりました。1800年代前半に、庵唄と庵屋台（京都の祇園で芸者がお客を楽しませたお茶屋などに使われる建築様式で設計された山車）が祭りに組み込まれました。庵唄には、当時江戸（現在の東京）で人気があった端唄の影響が見られます。庵屋台は竹笛と三味線（3本の弦を持つ伝統的和楽器）で庵唄を演奏する奏者たちと一緒に練り歩きます。新たな彫像や装飾の制作に相当な労力が注がれたことで、曳山もより豪華絢爛になりました。

祭礼行事は5月4日の宵祭に、堯王、恵比須、大黒天、布袋、関羽と周倉、寿老の6体の守護神像が山宿（一般公開の役目を与えられた家）に展示されることから始まります。5月5日の早朝、御神像がそれぞれの山宿から曳山に移され、行列の一部となります。行列は獅子舞が先導し、悪霊を鎮めるために使われる、縦に長い旗が取り付けられた剣鉦がその後ろに続きます。次に8本の傘鉦、四神旗（方位とそれに対応する星座を司る神である4神の旗）、3基の神輿が並びます。その後、曳山と庵唄を奏でる庵屋台が続いて、行列を締めくくります。夜間には、曳山に灯る無数の提灯が雰囲気盛り上げます。

地元の職人によって作られた曳山は6mの高さにそびえ、大きな車輪を導いて方向転換を行う男衆の手により、城端の通りを曳き回されます。車輪はケヤキでできており、通りを進む時に特徴的なきしみ音を立てます。これは城端曳山祭ならではの音であり、悪霊を払うと言われています。